

弾家の屋敷がいつ頃まであったのか、少ない史料ながら考察しておきたい。前号で披露した太鼓の南部屋さんのご主人の「弾さんは、商売を畳んでからしばらくの間、向島の〈三圃〉に仮住居をしていた」というひと言は、大変ありがたい情報であった。弾の出資企業、三井組ともご縁の深い神社だけに、真実味ある証言である。

弾家も加わった合併、明治35年（1902）の新会社・日本製靴株式会社（現・リーガルコーポレーション）の設立。明治40年（1907）の新会社・日本皮革株式会社（現・ニッピ）設立が、弾の商売を畳んだことに重なってくるから、明治40年以降と考えられる。この合併の前後に、事業の清算をし、家屋敷を手放したのではなかろうかと推定している。二代直樹（次男佑之助）の事蹟については、まったく伝えられていないが、同業大企業に伍し、悪戦苦闘しながらも新会社設立に寄与したのだから、大いに評価したい。

『かわとはきもの』No.163「靴の歴史散歩」⑩8に、弾家の亀岡町1丁目14番地の屋敷を取得し、居住していた人物が明らかになったので、それを報告している。原典は『浅草人物史』（大正2年實業新聞社蔵版）。浅草紳士録ともいうべき内容で、大変情報量の多い書籍である。

その主の名は、浅草区会議員・八田浪之助なる人物である。人物紹介の全文を転載しているので、ぜひ「靴の歴史散歩」⑩8を、もう一度読み返していただきたい。

東日本部落解放研究所の藤沢靖介事務局長（当時）から頂いた、業界誌『皮革世界』（皮革世界社）は、私の靴の歴史散歩の鉾脈

みたいなもので、再々活用させていただいている。その中の明治44年4月5日発行の『皮革世界』（第五年第七号）に、なんと初代直樹の四男、弾慎平の「東京皮革製造所」の全面広告を発見し、いささか感動してしまった（写真参照）。明治35年と40年の合併で、弾の事業は完全に消滅したかと思っただけに、うれしい発見であった。

広告文中、創業満三年とあるから、明治41年の創業で、当時最先端の製革法、クロームなめしで開業したようである。ダイヤモンドのマークを囲んで陸軍御用とあり、営業本社は浅草区猿若町三丁目五番地（現・浅草6丁目25番の内）とある。当時の猿若町は、老舗皮革商が薙めく〈皮革の郷〉であったから、広告もまた誇らしげである。



皮革世界第五年七号 明治44年4月5日号